

氏名 VAN GOMPEL DAVE
 ヨミガナ バンゴンペル デイブ
 学位の種類 博士（美術）
 学位記番号 博美第577号
 学位授与年月日 平成30年3月26日
 学位論文等題目 〈論文〉 17世紀「Kick」工場のラッカー表現と日本の漆芸表現の比較
 〈作品〉 Willem Kick箱：木地 Willem Kick箱：ラッカー塗り Willem Kick箱：日本とWillem Kick 南蛮輸出漆器パネル ヨーロッパラッカー：イギリスの中国様式シノワズリ ヨーロッパラッカー：Gerard Daglyの日本様式シノワズリ
 〈演奏〉

論文等審査委員

| | | | | |
|----------|----------|------|-------------------------|--------|
| (主査) | 東京藝術大学 | 教授 | (美術学部) | 小椋 範彦 |
| (論文第1副査) | 東京藝術大学 | 特任教授 | (グローバルサ ポートセンタ ー) | 井谷 善恵 |
| (作品第1副査) | 東京藝術大学 | 准教授 | (美術学部) | 青木 宏憧 |
| (副査) | 東京藝術大学 | 教授 | (大学美術館) | 黒川 廣子 |
| (副査) | 東京藝術大学 | 名誉教授 | () | 三田村 有純 |
| (副査) | 金沢美術工芸大学 | 教授 | (美術工芸学 部) | 山崎 剛 |
| (副査) | | | () | |
| (副査) | | | () | |
| (副査) | | | () | |
| (副査) | | | () | |

(論文内容の要旨)

論文は、5つの章から成り立ち、問題提起を投げかけた「はじめに」から始まり「結論」で終わる。この論文は、日本とオランダの関係性を探究し、日本と西洋の文化的架け橋としてのラッカーに焦点を当てる。この話の中心は、文化的入口としてのアムステルダムとの位置づけと東洋と西洋のラッカーの間の垣根を取り払った最初の人物であるウィレム・キックの位置づけである。そのため、この論文の中心的な研究課題は、「ウィレム・キックが作品の創作を行う上で、どの程度日本からの輸入漆器に影響を受けたか」である。歴史的な証拠はいくぶん希薄であるが、この論文は、その影響は見かけより明瞭でないことを論ずることを試みる。

Willem Kickと日本に関する議論を始めるため、適切な歴史的フレームワークを描写することが非常に重要であると認識している。そのため、先程の研究課題は、下記2つの小研究課題により補足される。1つ目は、「17世紀および18世紀の間、どのような方法により日本の輸出漆器はヨーロッパのインテリア様式に吸収されたのか？」2つ目の重要な課題は、「どのようにヨーロッパラッカー技術は発展し、どのような方法によりその職人は日本の漆技術をまねようとしたのか？」

日本の漆の歴史は東京藝術大学の教授たちはよく知られているため、日本の漆の歴史について議論することは差し控えるにした。代わりに、この論文は主に輸入漆器を通じたヨーロッパと日本の関係とヨーロッパラッカー技術の発展について焦点を当てる。第1章は、日本の輸入漆器について論じる。日本輸入漆器の3つの特徴的な時期、南蛮漆器、紅毛漆器および明治時代輸出漆器について、論じる。

第2章は、ヨーロッパラッカー工芸の一般的な発展について論じる。ヨーロッパラッカー工芸は、17世紀前半まで日本漆器とは無関係に発展した。シノワズリの大流行の後、18世紀後半にラッカーはヨーロッパのルーツに戻り、その後、ジャポニズムが流行した19世紀に、日本漆器に対する興味が活発になった。この3世紀間、ヨーロッパラッカーは、ゆっくりと明確な工芸の一派として成長したが、ヨーロッパの制限的なギルド体制により、未だに装飾的なペインティングと金箔技術と強い繋がりを有していた。

この歴史的なフレームワークを論じた後、第3章は、日本への文化的な入口としてのオランダ、特にアムステルダムと今では有名なラッカー先駆者のウィレム・キックについて焦点を当てる。この章では、日本とアムステルダムの相互関係およびキックがどの程度、輸出向け南蛮漆器により影響を受けたかを論じる。

第4章は、漆とヨーロッパラッカー材料の比較を行い、それぞれの材料の長所・短所を明らかにする。この章では、ヨーロッパの職人が東洋の漆器の複製を作るために材料的な制限を乗り越えるためにどのような努力をしたのかを論じる。全く異なる材料や道具で作業しながらも、ヨーロッパの職人は日本から到来した最も人気のある装飾技法を模倣しようとするために著しい想像力を発揮した。アムステルダム国立美術館とミュンスターにあるラッククンスト美術館の展示品が、この代表的な例に該当する。

最終章は、私の芸術作品と日本で暮らした4年間で私のラッカーに対する思いがどのように変化したかを述べる。また、日本の漆器とヨーロッパラッカーの関係およびラッカーの芸術として、工芸としての未来について私の考えを共有したいと考える。

(論文審査結果の要旨)

上記論文「17世紀Kick工房のラッカー表現と日本の漆芸表現の比較」は博士課程後期課程、博士号を授与するのに値する論文と評価する。その根拠を以下5点あげて述べる。

1. 12月の公開審査時に提出時の論文の語数が8万字を超えて博士論文として十分な語数があり、目次、参考文献もおおむね丁寧に構成され、博士論文としての書式の条件を満たしている。
2. 序文と結論などを除いて本文の章立ては5章で成り立ち、序文と結論の部分も矛盾なく、序文から各章を経てうまく結論に導かれている。
3. 第一章の「東洋と西洋のつながり：日本の輸出漆器について」は、日本語を母国語としないため、日本語の文献を読む際の読解力の不足があったが、一方、西洋の文献が特に詳細に調査されている。第二章の「ヨーロッパラッカーの歴史的発展の概要」及び、第三章の「アムステルダムとウィレム・キック」については、従来日本語で論述された論文等が少なく、特に第三章のオランダの家具職人の組合制度やキックの生きていた時代背景などはこれまでになかった先駆的研究である。
4. 第四章の「漆とヨーロッパラッカー：技術上の比較」については、歴史的な分野ではなくどちらかといえば保存科学の領域も含み、上記「第一～第三章」の論旨の明快さに比べると、論文指導者である筆者の研究領域外からくる指導不足もあり、論文というより説明に近い部分もみられるため、論文の構成としてはやや弱くなった感は否めない。ただ、それだけに、保存修復等の専門的な論述にならず、図版(写真を含む)を駆使したわかりやすい章となったともいえる。
5. 第五章については、作品を中心とした論題であるため、作品審査者にその評価をゆだねるが、執筆当初から比べると、設計図や、経過途中の写真などをかなり加え、その努力がよくみてとれる。

(作品審査結果の要旨)

Dave van Gompel氏は以前アムステルダム国立美術館に勤め、そこで出会った日本の16・17世紀の輸出漆器と出会った。Dave氏は当時のヨーロッパの人が感じた漆器への憧れを同じように受け博士研究が始まった。

研究の内容は、16・17世紀日本の輸出漆器がヨーロッパに与えた影響を考察する為、日本の漆と

ヨーロッパラッカーの技術比較研究【作品題名4,5,6】を重ねる。特にオランダの塗料芸術のWillem Kickという作家に着目して作品の模倣研究【作品題名1,2】を行い、自身の作品【作品題名3】へ展開を行なった。

現在、Willem Kickの表現について素材などの面では分析が十分に進んでない中、Dave氏は様々なヨーロッパラッカーの研究を多角的に行い推測し、木地からラッカー塗装まで仕上げたことは博士の作品研究に値する。また、【作品題名3】自己表現の展開についてはヨーロッパラッカーを使用せず日本の漆芸技術を使い仕上げた。

今後、Dave氏が研究を続けヨーロッパの文化と日本の文化が融合し新しい表現が生まれることを期待する。

(総合審査結果の要旨)

申請者はオランダからの国費留学生である。アムステルダム国立美術館の木工の保存工場の職員として勤務していた。オランダ東インド会社の研究がきっかけとなってアジアの文化に更に興味を持ち、日本での研究に没頭した。

オランダ出身である申請者は、日本とオランダの関係性を探求し、日本と西洋の文化的架け橋としての日本の漆と西洋のラッカーに焦点を当てたものである。

日蘭交流400年以上の歴史の中でオランダ人であるからこそ、より早くラッカー作品を手掛けていたオランダのウィレム・キックの存在に焦点を当てた。

日本国内でもウィレム・キックについて研究された論文等はほとんどなく、キックの存在についても未だあまり知られていない。キックの背景についても詳しく述べられ精巧な仕事ゆえのいろいろな制限がつけられ不遇な中での制作等についてはよく研究されている。

また、作品ではキック工場のラッカー表現の模造制作と日本の漆芸表現の比較として日本の影響と蒔絵技法を習得していたらといった仮定を元に西洋と東洋の融合による箱の制作は、デザインには不満があるが面白い比較表現であろう。

そのほかの作品としてはボリューム感が弱く南蛮蒔絵の写し、ダグリーのラッカー作品の写し、シノワズリパネルの写しに関して創作面では弱さがあるが及第点に仕上がっている。論文では制作技法、説明が多く見られ、述べているところが少なく感じるが、公開審査の発表では自身の言葉でとてもわかりやすく明確に伝わっていたのでとても評価が高い。提出された作品と論文は共に高い水準にあり、博士学位授与にふさわしいものと評価したい。